# 志賀直哉「清兵衛と瓢箪」考（中）
## ――瓢箪との出合いと「瓢箪」の形成――

日本文学／教授　寺杣　雅人

**はじめに**

「清兵衛と瓢箪」について著者である志賀直哉は、「これに似た話を尾の道から四國へ渡る汽船の中で人がしてゐるのを聽き、書く氣になつた」と自作解説「創作餘談」[1]で述べている。

直哉が尾道をはじめて訪れたのは大正元年の十一月十日で、「尾の道から四國へ渡る汽船」には翌々日に乗っている。船上で語られた、後に「清兵衛と瓢箪」となる話が東京からやってきた青年の耳をとらえたのは、大正元年十一月十二日のことであると断定してよいであろう。[2]

さらにこの自作解説で直哉は、

丁度「讀賣」の元日の新聞に頼まれてゐたのでそれを送った……

と、「清兵衛と瓢箪」の初出紙と発表年月日についても触れている。

大正二年元日の「讀賣新聞」を見ると、その第六面のなかほどに確かに「清兵衛と瓢箪」の全文が掲載されている。「清兵衛と瓢箪」の原話となる船上の音声テクストは、まずは自筆の書記テクストに書き写され、[3]それに虚構を加えて書き改めるという書記テクスト上の変形を経て、およそ五十日後に新聞紙上の活字テクストに到達したと考えられる。

前稿「志賀直哉『清兵衛と瓢箪』考（上）―テクストの変遷とある瓢箪の〈旅〉―」では、大正二年元日の「讀賣新聞」紙上に活字となった書記テクストのその後を追跡した。本稿は遡って尾道の町中にあった一個の瓢箪が、「小説家」としての道を歩み始めようとしていた青年によって活字の書記テクストとなるまで、すなわち文学テクスト中の「瓢箪」へと昇華していくまでの水面下の動態を探ろうとするものである。

**一　父との衝突**

直哉が東京麻布区三河台町（現港区六本木）の実家を飛び出し、尾道にやってくることになった直接の原因は、直哉の第一作品集『留女』の出版費用「五百圓」をめぐる父直温との対立にあったことはよく知られている。

この父子の諍いについて直哉は当日の日記に認めているし、「暗夜行路草稿」[4]にも、おそらくそれをほとんど脚色せずに書き留めたとみられる記述がある。

まず、大正元年十月二十四日の日記を見ておこう。

朝前日約束して置いた金を父に貰ひに行つた。父は其時自分について絶望的な事を切りにいふ。自分も腹を立てた。自分は自活する事をひきうけた。部屋へ來ても理由のない涙が流れた。

父が『留女』の出版費用を提供する約束は、父子の間で前日に出来ていたようである。[5]にもかかわらず、父直温はすんなりとそれを渡すことはなかった。父は息子に対して「絶望的な事」さえ一度ならず浴びせたというが、その具体的なやり取りはこの日記ではわからない。その後尾道にやってきた直哉は月「二圓」[6]で土堂町宝土寺上（現東土堂町八―二三）の三軒長屋の一軒を借りることになり、父子

の交渉は、その一室で執筆したと思われる「暗夜行路草稿2」(尾道に行くまでの事)[7]に会話文をまじえて示されている。[8]先の日記とは異なり、視点は三人称の人物「彼」に置かれているが、この「彼」とはすなわち直哉自身であると考えてよいであろう。[9]

「全體貴様は小説なぞを書いて居て將來どうする心算だ」と父がいつた。

彼はむつとして、最初承知したゞけの金を出すのに要らん事を云ふ、と腹で腹を立て默つてゐた。

「第一小説家なんて如何な者になるんだ」と父が云ふ。

「馬琴でも小説家です。然しあんなのは極く下らない小説家です。もつと、づつと偉い小説家になるのです」

「空な事を……」と父は苦笑した。

彼も異う意味で自分ながら子供臭い事を云つたと思つた。然し此場合つゝいにしろ彼が馬琴を出したのは父が馬琴好きで、彼が知つてからも二三度八犬傳を通讀したのを知つて居たからで、彼自身は實は馬琴は何にも讀むで居なかつた。而して讀まずに馬琴は嫌いだつたのである。

二人は少時默つて對座した。

すると不意に、

「どうだ。貴様はこれから自活をして見ては」と父が云ひ出した。

彼は一寸胸を叩かれたやうな感じがした。而して、

「それなら自活しませう」と答へた。

父は「彼」が「小説家」になることに理解を示さない。だいたい「彼」が大きな意義を見いだし、目標と定めた「小説家」という職業を理解していないようである。そこで「彼」は咄嗟に父が馬琴好きなのを突いて、あなたの好む馬琴も「小説家」である、が……とよく知りもしない馬琴を利用した即妙の反撃を試みている。[10]だが、父を説得することはできなかった。しばらく沈黙が続いた後、父は「彼」に「自活」を持ち出し、「彼」は即座にそれを受け入れている。

父子の衝突とそれが直哉の「自活」を決定するにいたる経緯は、ほとんど脚色されることなく、ここに正確に辿られているのではなかろうか。「小説家」という職業に対して両者が抱く思いが対照的であったこともこの一文にはっきりと現れている。

ただ、父子の諍いが「自活」という言葉に逢着するまでの概要はここに示されるところとして間違いないであろうが、たとえば先の日記で「父は其時自分について絶望的な事を切りにいふ」と概括された父の発言は、どこまで具体的に表されているだろうか。当日の日記の文言が抽象化されているように、衝突から「半月」をへてやってきた尾道で草したこの「暗夜行路草稿」でも、直哉の筆に何らかの抑制が働いたのか、その諍いの全容はいまだ完全には明らかにされていないのではなかろうか。つまり、「絶望的な事を」「切りに」言った父の発言に対応させるには、ここに写されているやり取りはやや穏やかすぎるように感じられるのである。

あるいは、そのように感じさせるのは、それからおよそ一年半ののち、大正三(一九一四)年四月の『白樺』に発表された「兒を盗む話」があるからかもしれない。「清兵衛と瓢箪」と同様、この作品の舞台も尾道を思わせる「五百哩ばかりある瀬戸内海に沿うた或小さい市」とされ、ここには父との衝突を契機として東京からその町にやってきた人物が描かれている。そして、父との諍いは次のように生々しく叙されているのである。[11]

或朝父が、

「貴様は一體そんな事をしてゐて將來どうするつもりだ」と蔑むやうに云つた。

「貴様のやうなヤクザな奴が此家に生れたのは何の罰かと思ふ」こんな事を云つた。

尚父は私の顔を見るさへ不愉快だとか、私が自家にゐる為に小さい同胞の教育にも差し支へると云つた。父は私が現代の弊害を一人で集めてる人間のやうに云つて、だから、私(或ひは私達)が社會から擯斥されるのは當り前だと眞正面から平手で顔をピシャリ〳〵撲るやうな調子で云つた。其處で私も亂暴な事を云つた。そして久しぶりで泣いた。

むろんこれは「兒を盗む話」という志賀直哉作品の一節である。ここに展開されている感情的な激しい応酬が父と直哉の大正元年十月二十四日の朝を正確に写

したものであるという保証はなく、父親の発言に虚構や誇張がいっさい含まれていないと断言することはできない。

ただし、ここには確かに「絶望的な事を」「切りに」言う直温らしき父親がいる。「父は其時自分について絶望的な事を切りにいふ」という日記の文言に対応する内容をもつのは、あまり時をおかず書いた「暗夜行路草稿」よりも、むしろ時を経て書かれたこちらの方であろう。父直温への遠慮のためか、「暗夜行路草稿」ではおぼろげにしか示されなかった父の言葉が、ここですべての覆いを外し、これでもかというほどに露わにされた、という印象を受ける。「兒を盗む話」に描かれたこの主人公の回想は事実そのままであると断定できないにしろ、少なくとも直哉の体験した心理的事実が直截に表現されているとはいえるであろう。[12]

## 二 「自活」への道

大正元年十月二十四日の朝、出版費用を出す出さないに端を発し、父子の対立はエスカレートしていった。父と子は互いに感情を高ぶらせ、相手を蔑むような言葉や乱暴な言葉が飛び交った。そして、それがおさまったかのような沈黙がしばらく続いた後、父の口から出たのが「自活」であった。

もう一度、「暗夜行路草稿」からその部分を引いておこう。

二人は少時默つて對座した。

すると不意に、

「どうだ。貴様はこれから自活をして見ては」と父が云ひ出した。

「すると不意に」とあり、「自活」という語の出現は、ここでは唐突であったとされている。それは、まず第一に直哉にとってそのように感じられたということであろうし、沈黙の後の「自活」であるから何の脈絡もなくいきなり出現した感があるのも事実である。

しかし、この父子の対立の底をよくみると、そこにははじめから子の職業の問題、生活の問題が横たわっている。父が「自活」を持ち出したのは、むしろそこから自然に導かれる結果であって、その点からすれば決して唐突とはいえないであろう。

「全體貴様は小説なぞを書いて居て將來どうする心算だ」という冒頭の父の言葉さえ、すでに子の「自活」を問題にしているのである。そしてまた、満年齢二十九歳になっていた直哉に対する父の心配が、小説を書くことで将来独り立ちできるのか、経済的に生活が成り立っていくのか、という点に向けられるのもしごく当然のことであろう。[13]

無論、直哉においても、父から言われるまでもなく、自身の「自活」が大きな課題であることに気づいていないはずがないであろう。父と衝突したこの日の日記にその後の直哉の行動が記されているが、次のような武者小路実篤の言葉も録されている。

文部省の展らん會に行く、かへり武者訪問、先からいつてゐた自活が餘り簡單に早く來た事を武者はいつた。

「先からいつてゐた」というのは、直哉が「自活」の意思をもっていて、それをこの友人に告げてもいたということであろう。そして「餘り簡單に早く來た」というのであるから、「自活」の実行をもっと先のこととしていたか、実行しようとしてなかなか踏み切れないでいたということではなかろうか。

ただし、「自活」を小説で身を立てていく、ということに限定するならば、そして直哉はかたくなにもそのように限定していたのであるが、それは容易なことではない。そうであるならば、たとえ「自活」の必要はわかっていても、そしてそれを友人に告げることはしていても、実行に移すことには躊躇せざるをえなかったはずである。

先の「不意に」は、父親の口から出た「自活」が、このような状況下の直哉に対して「不意に」重くのしかかってきた、ということであっただろうか。

「暗夜行路草稿2」（尾道に行くまでの事）では、父が「自活」を促し、子が「それなら自活しませう」と応じた後を次にように叙している。

実際それは彼には彼の一番弱る場所へ追ひつめられた事だつた。然し、それが若し自分のいふ嵐になるのではないかといふ氣もした時に、彼は深く考へる餘裕もなく左う答へた。答へながら又一寸どきりとした。彼は自分の弱い心をはげました。すると云ひ出した父が反つて、

「貴様は一時の感情で直ぐ左う云ふ事を云ふ……」とこんな事を云つた。そ

れは彼に自活の能力のない事は彼自身に明かな如く父にも明らかな事だつたからである。

「一時の感情で云つて居るのではありません」

「左うでなければいゝが、……本統にやつて見るか」

「えゝ」

「それならよからう。金は前に約束をしたから五百圓だけは呉れてやる」

左う云つて父は起つて脊後（うしろ）の戸棚から小切手の帳面を出して來て、それを書いて渡した。

先に父が「自活」を「促し」たとしたが、正確にいうならば、「自活」を「試みることを促し」たというべきであろう。父は「自活をして見ては」、「本統にやつて見るか」と言っているのである。確かに直哉に「自活の能力のない事」を父はよく知っていたのであろう。

そして直哉にしても、自分に「自活の能力のない事」を知りながら、「自活」を引き受けたのである。それはやはりまったく「一時の感情」によるものではないともいえないであろう。

しかし、引き受けた以上、「自活」に向けて動きださねばならなかった。直哉にとって「自活」とは、端的にいえば、小説を書いて生活を成り立たせるほどの収入を得るということであった。

だが、実のところ、直哉の現在は『留女』の出版費用「五百圓」[14]を父から融通してもらわねばならない身の上であった。つまり、「小説家」としての収入によって生活を成り立たせるどころか、逆に「小説家」であるために大金を支出しなければならない状況におかれていたのであった。

「自活」は、無謀な安請け合いであり、不安満載の船出であったといわねばなるまい。

## 三　瓢箪との出合い

直哉が千光寺山に登ったのは、尾道に着いて駅前の旅館に宿泊した翌日、すなわち大正元年十一月十一日のことである。千光寺山の山上を目指したのは、いまま一度も目にしたことのない、向島をこえて広がる瀬戸内の眺望を得るためでも、これから住もうというこの町の全貌を掌握するためでもあった。

十時頃に千光寺といふ寺を指して宿を出た。此寺は松と大きな石の一っぱいにある高い山の上にある。一ト眼に全市は素より何とかいふ前の大きな嶋を越して向ふの海までも見渡せると思つたから、此所から、落ちつくべき場所の大體を見やうと思つたのだ。

これは「暗夜行路草稿4」からの引用であるが、この文章は「伊吾兄」という宛名から始められている。伊吾は里見弴の愛称であるから、実在の人物に宛てた手紙という形をとり、内容的にも尾道行で見聞した事実を記録したものとみられる。

この草稿の冒頭には次のような一文もある。この文章が旅の「日記」と称すべき内容をもつものであり、また雑誌への掲載も視野に入れて書かれていたことを思わせる。

旅の日記をダラシのない氣分で毎日々々書くのは考へものとは思つたが、後で何かになりさうだから、續けるつもりだが、雑誌に出すのは見合はせて貰ふかも知れない。

「旅の日記」を書き「續ける」というのであるから、「草稿4」以前の草稿も「旅の日記」であったといえ、「草稿4」以降にも同じ性質をもつものがあることを意味する。尾道行に関わる記述は当然その範疇にあり、直哉の体験した事実を記録したものとみてよいであろう。

そしてこれらの「旅の日記」について、「後で何かになりさう」とも述べているから、これらの文章は後に書かれる作品のための取材メモという意味をもっているとみなければならない。実際『改造』誌に大正十年一月から昭和十二年三月まで断続的に連載される「暗夜行路」にこの取材メモが生かされていくのであり、確かにそれこそこれらの文章が「暗夜行路草稿」とよばれる所以であった。そして大正二年一月にいち早く発表された「清兵衛と瓢箪」もまた「後で何かになりさう」なものの中から生み出された一つの「何か」なのであった。

さて、尾道の瓢箪が直哉の目にとまるのは、千光寺山に登ったその日、山から

尾道の町中に下りてきたときであった。「暗夜行路草稿4」には次のように記されている。

町へ下りた。路幅もせまし、路も屈りくねつてゐるが、商業地といふだけ、店々が何んとなく充實してゐて、人間の働作でも、生々してゐる。往來を歩く人が、ブラ〳〵としてゐない。問屋の多い所だ。それに骨董店が割りに多い。それと妙に思つたのは所々で瓢簞を賣つてゐる。――後で宿の下女に聞いたのだが、尾の道で瓢簞を持つてない人はない位の流行ださうだ。宿の主も何百といふ程持つてゐると話して、「丹波行李に一っぱいです」と云つた。丹波行李の大きが(ママ)知れないからハッキリしないが、兎も角色々な商賣家で下げてゐる。

こうして尾道での瓢簞の流行を報告した後、その翌日に四国へ渡る船での見聞が書き記されている。すなわち、それが後に「清兵衛と瓢簞」となる「ある小供」と瓢簞の話であった。

今日道後へ渡る船で聞いた話だが、ある小供が、二十錢で瓢簞を買つて、それを學校へ持つて行つたら先生に大變叱られて、自家まで小言を云ひに來たのださうだ。それで其小供は又兩親からヒドク怒られた。親爺は大工で追ン出すといふ程の騒ぎだつたといふ。母親はその瓢簞は直ぐ道具屋に賣つて了ふつもりで、持つて行つた。所が道具屋が二円で引きとらうといつた。それを聞いた母親は若しかするとこれは餘程い、物だと思つて、それでは賣れないといつた。商人は五圓に上げた。横着な母親はそれでも離さなかつた、と(ママ)う七圓まで上げて漸く手離した。中々皮肉な話だ。

「暗夜行路草稿4」に書かれているこの「道後へ渡る船で聞いた話」は、「暗夜行路」には入っていない。それは、当然「暗夜行路」を彩る挿話の一つとなる可能性があったわけだが、それより早く一個の自立した短編「清兵衛と瓢簞」となり、「暗夜行路」の草稿を抜け出たためであろう。

その結果、宿の主が丹波行李に瓢簞を所有しているという話だけが残り、次に示すように、「暗夜行路」にはその部分が入れられている。[15] ただし、「暗夜行路草稿4」では「何百といふ程」の瓢簞を持っていた「宿の主」であるが、「暗夜行路」では同じ「宿の主」でもなぜか「幾つかの瓢簞の持主」とされ、所有する瓢簞の数が激減している。

瓢簞を下げた家(いへ)の多い事も彼には物珍らしかつた。骨董屋、古道具屋、又それを専門に賣る家(いへ)は素より、八百屋でも荒物屋でも、駄菓子屋でも、それから時計屋、唐物(たうぶつ)屋、印判屋のショー・ウィンドウでも、彼は到る所で瓢簞を見かけた。彼は歸つて女中から宿の主(あるじ)も丹波(たんば)行李に幾つかの瓢簞の持主だと云ふ事を聽いた。

ここで謙作が瓢簞を見かけた店舗の名を列挙しているが、これは「暗夜行路草稿4」ではただ瓢簞を「色々な商賣家で下げてゐる」とのみしていたところである。ちなみに、「清兵衛と瓢簞」でも清兵衛が瓢簞を下げたさまざまな店の前に立っているが、それは「暗夜行路」と酷似した表現となっている。

……彼は町を歩いて居れば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でも又専門にそれを賣る家(うち)でも、凡そ瓢簞を下げた店と云へば必ず其前に立つて凝(ぢ)つと見た。

そもそもは千光寺山を下った直哉が「色々な商賣家で下げてゐる」瓢簞を目にしたのがはじめである。そのとき直哉自身が瓢簞に注いだ視線が、清兵衛が瓢簞に注ぐ視線となり、後には謙作が瓢簞に注ぐ視線ともなっているのである。

なお、直哉の大正元年の日記をみると、「瓢簞を持つてない人はない位」の町にやってきた直哉が、その影響によってか、尾道の町中で瓢簞を三個購入しているのがわかる。

十一月二十九日

かへりに瓢たんを三つ買つて、作つて置いてもらつた。

そしてさらに次の日にも直哉はその店を訪れている。

十一月三十日

瓢を賣る家によつて見た、未だ出來てなかつた。

あるいは直哉はすでにこのとき、「清兵衛と瓢簞」の執筆に取りかかっていたのかもしれない。

## 四　「瓢箪」の形成

「暗夜行路草稿4」に書き留められた「道後へ渡る船で聞いた話」が実際に直哉が船上で耳にした話を忠実に写しているとすれば、元の話ではじめに「二十錢」で買った瓢箪が「七圓」で買い取られている。「七圓」は「二十錢」の三十五倍の額である。

「清兵衛と瓢箪」では、清兵衛がその瓢箪をしもた屋の婆さんから購ったときは「十錢」であった。おそらく元の話の「二十錢」を標準価格としてふまえたためであろう、「ぼうさんぢやけえ、十錢にまけときやんせう」とその婆さんに言わせている。そして骨董屋がこれを買い取ったとき、その額は「五十圓」にまで上昇した。それは元の値の五百倍にあたるが、それでも留まらず、その後さらに骨董屋は地方の豪家に売ったとして最終的には「六百圓」にまで値を上昇させている。それはもとの「十錢」の六千倍となる額である。元の値と最終売価の双方を動かしてその幅を広げた結果である。

もとの話と「清兵衛と瓢箪」の間のもっとも大きな違いは、この元の値と最終売価であり、すなわちその間の三十五倍と六千倍という上昇率であろう。

元の話の三十五倍という上昇率は直哉がこの話に関心を寄せた大きなポイントであっただろう。だが、直哉はそれをはるかに凌ぐ上昇率に改めたのである。直哉にはどうしてもそこを誇張し、強調する必要があったのであろう。

ところで、この「清兵衛と瓢箪」と作品集『留女』との間には不思議な縁がある。直哉を尾道に向かわせたのは『留女』の出版費用をめぐる父と争いであったとは先述したが、その争いは、さまざまな形で「清兵衛と瓢箪」の中に映し出されている。[16] そして結局『留女』の出版は実現し、奇しくも「清兵衛と瓢箪」が新聞紙上に発表されたのと同じ大正二年元日に刊行されるのである。

直哉は出版費用をめぐって対立し、「小説家」観をめぐっても対立した父に「清兵衛と瓢箪」を見せることを意図していた。後に直哉は「稲村雑談」で次のように述べている。[17]

> 讀賣新聞の新年號に、と云はれて「清兵衛と瓢箪」といふ短かいものを書いたが、その中に馬琴の瓢箪といふのが出て來て、子供の親爺が立派なものだと讃めると、子供が大きいだけで、自分にはつまらぬといふところがあるが、「讀賣」は僕の親爺も見てゐるから、親爺に讀ますつもりで、さう書いて置いた。馬琴の小説、馬琴という「極く下らない小説家」に直哉が対応させたのは自らの書こうとする小説であり、そうなろうとしている「づつと偉い小説家」であろう。「清兵衛と瓢箪」で大きな馬琴の瓢箪とは対照的に描かれるごく平凡な形をした小さな瓢箪には自らの小説、なろうとしている「小説家」が託されているといえるだろう。

そうであれば、小さな瓢箪の値段はどこまでも上昇していく必要がある。[18] それは小説家として高く評価され、経済的にも自立していくことを意味している。それは直哉にとって切実な願いであっただろう。

ところで、直哉が尾道にやってくる前の月、大正元年九月の『中央公論』に「大津順吉」が発表されているが、「暗夜行路草稿2」ではこの作品について次のように記している。

> 彼の最近の作は百何枚かの彼が女中と起した出來事を書いた物だつた。彼はそれを或雑誌に頼まれて書いた、而して原稿料を百圓貰つた、これは彼には初めて自分で得た金だつた。彼はその作の出來榮を餘り好まなかつた。若し金が欲しくなければ、途中で止めたものだつた。然し金が欲しかつた。

この原稿料の「百圓」が「初めて自分で得た金」であった。そして「小説家」として「自活」していくならば、こうした収入を継続的に得る必要があった。それが自身の「小説家」としての力量をしめすことであり、何よりもそれが父親を納得させる唯一の手段であった。直哉はかたくそう信じていた。

先の引用部は次のように続いていく。

> 彼は父に自分でも金を得る事が見せたい氣があつた。自分の仕事でも金になるといふ事を見れば父はもつと自分の仕事に寛大になつてくれるだらうといふ氣があつたからである。彼は自分の作が或る市價を得る事に左う執着はなかつた。然し父には市價で見せる以外自分の仕事の價を見せる事は出來ないと思つてゐた。

この直哉の思いと「清兵衛と瓢箪」における「瓢箪」の値の上昇とはけっして

無縁ではないであろう。[19]

## 結び

大正元年秋、尾道にやってきた志賀直哉は、「小説家」として「自活」することを強く望んでいた。またそれは強く求められてもいた。

「清兵衛と瓢箪」には、「小説家」として「自活」することを願う直哉の思いがこめられている。「五寸ばかりで一見極く普通な形」をした「十錢」の瓢箪が清兵衛の手によってあっという間に「六百圓」の値がつくまでになる飛躍は、「小説家」であろうとする直哉の自恃を表現すると同時に、それはまた「小説家」としての自立と成功を願う直哉の祈りでもあったのではなかろうか。

ところで、本稿の冒頭で引用した「創作餘談」には、次のような「清兵衛と瓢箪」の原稿料に関する記述が続いている。価格の飛躍的上昇を内容とし、経済力の向上を託したはずの「清兵衛と瓢箪」には、思いの外安い対価が支払われたようである。

丁度「讀賣」の元日の新聞に頼まれてゐたのでそれを送ったが、原稿料として一篇三圓の禮を貰つた。私の稿料の安い方のレコードだ。

望んだ金額を大きく下回っていたということだろうが、それは「小説家」としての「自活」を志す直哉の期待が大きかったためでもあろうか。[20]「三圓」といえば、「清兵衛と瓢箪」における小さな一個の瓢箪の二百分の一の値である。

ちなみに「清兵衛と瓢箪」が「讀賣」紙上の活字テクストとなったこの大正二年元日、直哉の第一作品集『留女』は洛陽堂から一冊「定價金壹圓」で発行されている。

注

(1) 「創作餘談」(『改造』第10巻第7號、昭和三年七月)

(2) この原話は、「暗夜行路草稿4」に見えるが、この記述の少し前に、「(今は道後にゐる)」という挿入句が書き込まれている。また、この原話は、「今日道後へ渡る船で聞いた話」として紹介されている。これらのことからすると、この原話は、尾道から四国へ渡った日、すなわちこの話を耳にした十一月十二日の夜に道後温泉で書き留められたと考えられる。注(8)参照。

(3) 「暗夜行路草稿4」には、この日の記録らしき記述がある。

翌日、〈[欄外]十二日〉四時半頃起きる。

番頭に送られて、五時十五分宿を出る。下りの列車がついて人通り一時繁い寒い中を外套を着て直ぐの船つきに行く。……高濱へついたのが十二時過ぎてゐた。

ここからすると、直哉がこの原話に接したのは、十二日の午前中であると考えられる。

(4) 「暗夜行路草稿」の存在は『志賀直哉全集』第六巻(昭和四十八年)の刊行によってはじめて明らかとなった。因みに、紅野敏郎「志賀直吉」(昭和六十一年十二月五日付朝日新聞)に、

直吉さんは全集編集の際、だれも残っているとは思っていなかった『暗夜行路』の草稿はじめおびただしい生資料をそっと私たちに示された。

とある。「全集」は岩波書店版『志賀直哉全集』(昭和四十八年~四十九年)をさしている。志賀直吉氏は志賀直哉の令息(二男)で、志賀直哉の著作物に対する著作権の継承者である。

(5) 前日の日記には、次のような記述もある。ここからすると、「約束」していたとも言い難い。

此の朝父に本を出すから金をくれと頼む、見合はすといつたではないかといふ。少し贅澤な本を作りたいからといふ、考へて置かうといふ、

(6) 「暗夜行路草稿4」による。「尾ノ道」(『稲村雑談(二)』、昭和二十三年十一月)には「家賃は二圓五十錢」とある。

(7) 「暗夜行路草稿2」(尾道に行くまでの事)には、たとえば、「此正月に又女の兒が生れた」という記述がみえる。この「女の兒」は「祿子」であり、年譜によると明治四十五年の一月五日に生まれている。したがって、この草稿は明治四十五年、すなわち直哉が尾道にやってきた大正元年に書かれたと考えられる。

(8) この草稿は大正元年秋に認められたと考えられるが、注(4)でも触れたように、これが読者の前に示されるまでにはそれから六十一年を経なければならなかった。

(9) 「暗夜行路草稿」で、東京での父との衝突や尾道・道後・宮島などでの出来事・見聞を記した部分は、ほぼ直哉自身の体験した事実と考えてよいであろう。それは「暗夜行路」においても同様で、尾道の棟割長屋に落ち着いた主人公・時任謙作について、

彼は久し振りに落ついた氣分になつて、計畫の長い仕事に取りかかつたのである。それで彼は自分の幼時から現在までの自傳的なものを書かうとした。(前篇　第二ノ三)

と書かれているが、この謙作も直哉自身であろう。棟割長屋の六畳の一室で書いていた「暗夜行路草稿」の内容は、この「自傳的なもの」を書くための取材メモであり、日々の記録であり、過去の追憶であり、ほとんど虚構のまじらない事実を記したものと考えられる。

なお、『志賀直哉全集』第六巻の「後記」には、「暗夜行路草稿」における登場人物の名について、

主人公の名前にしても、「自分」「順吉」「俊行」「信行」「高行」などと變っていき、「暗夜行路」という標題の草稿があらわれてきた時點で、「謙作」という名がはじめて出てくる。

と説明されているが、「草稿4」には「志賀」(53頁)、「草稿5」には「直哉」(57頁、58頁)さえ登場している(いずれも『志賀直哉全集』第六巻)。

(10) 自作解説「創作餘談」にも次のような直哉自身の言葉がみえる。

尾の道へ來る前、父が「小説などを書いてゐて、全體どういふ人間になるつもりだ」といつた時、「馬琴でも小説家です。然しあんなのは極く下らない小説家です」こんな事を私は云つた。

ここでの父と「彼」の会話は実際に父直温と直哉によって交わされたものであるとみてよいであろう。

(11) 「或る男、其姉の死」、「暗夜行路草稿14」にも同様な記述が見られる。

(12) 「兒を盗む話」について「創作餘談」では「尾の道生活の経験で、半分は事實、兒を盗むところからは空想」と記している。

(13) 日記によれば、明治四十五年四月六日には父直温との間で直哉の「生活問題」が話題になっている。

(14) 「尾ノ道」(「稲村雑談(二)」、昭和二十三年十一月)では、父から受け取る金額は「五百圓」ではなく「千圓」とされている。

(15) 「暗夜行路」前篇(第二ノ二)

(16) 「暗夜行路草稿14」には、「まるで将來望みのない人間だ」という直温らしき人物の発言がみえる。これは、「清兵衛と瓢箪」における父親の発言「将來迚も見込のない奴だ」にほぼ等しい。

(17) 「尾ノ道」(「稲村雑談(二)」、昭和二十三年十一月)

(18) 「六百圓」は『留女』の出版費用「五百圓」をも凌駕する値である。瓢箪の最終価格を「六百圓」としたのは、この父との諍いの元となった「五百圓」を意識したためであろうか。

(19) 「或る男、其姉の死」にも、次のような記述がみえる。

僕は仕事の方で父上から直接の理解を得ようとは嘗て考へた事はありませんが、それが或る市價を生ずるやうになれば其時は流石に父上も或る程度に認めて下さるに違いないと、其處に實は望みをかけてゐたのでした。

(20) 前年の中編『大津順吉』の稿料が百円であったことも思い合わせられる。

(本稿で使用した「清兵衛と瓢箪」本文、「暗夜行路」本文、暗夜行路草稿、志賀直哉日記、志賀直哉書簡等は、すべて『志賀直哉全集』(昭和四十八年～四十九年)に拠った。)